

2010ワールドカップ南アフリカを楽しむ方法

望月 聡¹⁾

The Way to Enjoy the World Cup

Satoru MOCHIZUKI

Key words : resolution, motor activity, organizational power, ball possession

1. はじめに

世界最大の祭典と呼ばれ、テレビの視聴者数はオリンピックを凌ぎ、世界中の人々が歓喜の渦に巻き込まれるFIFAワールドカップ。予選大会と本大会で構成されており、本大会は4年ごとに行われる。1930年第1回ウルグアイ大会から始まり、19回目となる2010WC南アフリカ大会が2010年6月11日に開幕する。9都市10会場、標高差が0mから1,800mと高地対策のストレスとの闘いでもある。

岡田ジャパンの目指す「ベスト4」。誰もが首を傾げ、メディアの批判は凄まじく可能性についての肯定的な記事は見当たらない状況である。サポートしてくれることを期待していたサッカー関係者でさえも、懐疑的な人が多い。

大会期間中には、開幕から7月11日の決勝戦までに、64試合の熱戦が繰り広げられる。予選グループEの岡田ジャパンはどう戦って目標を達成するのか、決勝トーナメント進出するための攻略等を考察しながら、ワールドカップを楽しむ方法を見つけていきたい。

2. 大会概要

世界を6地域に分け、各大陸の出場枠を勝ち抜いてきた32チームが、8グループに分かれ予選リーグを行う。上位2チームのベスト16が決勝トーナメント方式で優勝チームを決定する。

日本チームはグループEで、第1戦カメルーン、第2戦オランダ、第3戦デンマークと

なった。この4チームは実力的には大差がないと見られている。日本にとっては決勝進出にはチャンスであるが、4チーム全チームにチャンスがあることでもある。

3. 岡田ジャパンの戦い方

「ワールドカップでベスト4に入れない理由は何もない」と岡田監督は断言した。

今までの過去の大会を振り返っても、決して日本は戦術的に劣ってはいない。一瞬の油断やタイミングで勝負は決まっていると捉え、その「スキ」を埋める。またそれに気付くこと、それを埋めようとする雰囲気を作り上げることが目標達成への道になると考えている。

岡田監督のチームコンセプトは、全体としてはシンプルなもので「全員攻撃・全員守備」である。攻守にわたってアグレッシブにハードワークする。攻撃は点を取るために攻める。

守備は相手のボールを奪うために守備をする。点をやらないためではなく、相手のボー

表1 予選リーググループ

GroupA	南アフリカ	メキシコ	ウルグアイ	フランス
GroupB	アルゼンチン	ナイジェリア	韓国	ギリシャ
GroupC	イングランド	アメリカ	アルジェリア	スロベニア
GroupD	ドイツ	オーストラリア	セルビア	ガーナ
GroupE	オランダ	デンマーク	日本	カメルーン
GroupF	イタリア	パラグアイ	ニュージーランド	スロバキア
GroupG	ブラジル	北朝鮮	コートジボワール	ポルトガル
GroupH	スペイン	スイス	ホンジュラス	チリ

1) 競技スポーツ学科

ルを奪うために守備をする。

攻撃に関しては、ゴールを目指すこと。自陣エリアと中盤のエリアでは、特にシンプルにボールを動かしてビルドアップしていく。シンプルにボールを動かすためには、パススピード・サポートの早さが必要で、人とボールが動くパス&ムーブが要求される。25m以上のパスの精度が落ちるので短い距離のパスを繋ぎ、サポートを早くして数的優位を創る。相手が寄ってきたらサイドを変えて、またそこへ早くサポートをして数的優位を創る。そういうことで走り勝って、崩していくというイメージである。

そしてラストの相手ゴール前に入ったら、リスクを冒す勇気を持ってシュートを打つ。相手を外して打つ。または相手を振り切ってゴール前に飛び込む。クロスボールはGKとDFの間を狙うというのが原則である。また相手がゴール前に下がって守りを固めたら、ペナルティエリアの角からゴールラインにかけてのエリア（ニアゾーン）を使って攻略もする。

それでボールを失ったら、その瞬間に取り返しに行く。下がらないで前に出て取り返す。攻守の切り替えの速が必要で、これが「我々の命」だという言い方をしている。ディフェンスに関しては、ボールへのプレッシャーとカバーリングだけです。ボールのところに常にプレッシャーをかけて、他の選手がカバーリング、これを日本人全員でやる。チャンスの時には、一斉にプレッシングで全員が押し上げてボールを奪いに行く。要するに、下がって待つ守りではなく、ボールのところに出ていくディフェンスをする。それ以外にカウンターに対しての守り方、自陣のゴール前はゾーンではなくて、人を掴む守備等があるが、基本的にはこのようなイメージである。

これから凌ぎ合いの戦いを制するうえで、その根幹となる部分、①勝負への執着心（これは日本人なら武士道、大和魂として本来持っているメンタルは強いはずである）②組織力（協調性や和を大事にすることは日本人の武器）③チームへのロイヤルティ（忠誠心）は日本人として十分備えている。これが支えとなり技術・戦術的な部分が実践で発揮

でき、それがベスト4の確率や可能性を高めることになる。

4. ベスト4への攻略とまとめ

岡田監督のコンセプト、サッカー観に関しては十分に期待できる。しかし実際の代表戦の強化試合を観てベスト4は無理と考える。そこで目標達成するために、攻撃と守備の2つの視点から考察する。

①攻撃面では、楔のパス・相手のバイタルエリア（スペースと足元の両方）でのパスを受けることができ、ゴールを奪うプレーが実行可能な選手（FW）の存在が必要不可欠である。なぜなら、今までのサッカーの歴史で証明されているからだ。上手いだけの選手ではなく、ゴールを奪うことができる選手が勝負を決定づけるからだ。

また勝利するため、ゴールを奪うためには縦パス、前方へのパスが必要である。現在の日本チームは少なく精度も高くない。速いテンポでパスを繋ぐポゼッション能力は高いものがあるが、相手にとって怖くもないし、ゴールが奪えそうにない。いつかボールを奪われカウンターを受け、失点するようになる。しかし、このことを意識すれば技術レベルは高いのでパスがバイタルエリアに入るはずである。そこで必要になってくるのはそれとセットとして考えられるパスを受けられる選手である。だからこそ、このようなプレーが実行可能な選手を使う・創る・探すことが必要でありカギになってくる。

②守備面では世界基準のセンターディフェンスの存在である。攻撃面の逆として捉えると分かりやすい。ゴールを奪うためにあらゆる手段を使ってくるゴールゲッターを止められるか否かである。スタート選手として予想されるトゥーリオと中沢。不安はあるが経験豊富である。駆け引きを伴った「個人の能力と周りのカバーリング」が機能した時に対応可能となり、目標が見えてくる。

参考文献

- 1) 岡田武史 (2009) 人間万事塞翁が馬, JFA news, 301: 4-5.